関西自然保護機構会報12：9－12，1990

ゴルフ場の鳥

斎藤隆史
（筑波大学生物科学系）

はじめに

1971年からゴルフ場において，ムクドリの繁殖生態を調査しているが，調査中に観察された鳥の記録からゴルフ場の鳥の特徴と過去19年間にみられた繁殖鳥種の変遷について述べてみたい。

調査は，神奈川県相模原市大野台にある相模原ゴルフクラブで行なった。ここは，1955年にクヌギ，コナラを主とした雑木林と原野を造成して設立された36ホールのコースであり，総面積160haのうち，70haが林である。

フェア・ウェイとフェア・ウェイの間やグリーンとティの前後に林があり，全体として連続しているが，幅10mから60mの狭い帯状で，数ケ所に1haから3haのまとまった林がある。植生は，植林されたアカマツ，スギ，サワラの針葉樹林，原植生であるクヌギ，コナラの落葉広葉樹林および両者の混交体である。ゴルフ場の管理上，二ケ所の林を除いて，下層木と下生えはまったくない。また，場内には0.1ha以下の六ツの小さな池がある。

ゴルフ場の周囲は設立当時の雑木林が宅地化され，現在では市街地になりつつある。

ゴルフ場の鳥類相

表1は1971年から1989年までに記録された種類を示した。出現種類は95種であり，このうち6種が野生化した飼鳥であった（アミハラとギンパラは繁殖した）。日本産89種は陸鳥74種と水鳥15種に分けられ，季節的な出現についてみると，留鳥31種，夏鳥9種，冬鳥24種，旅鳥（春と秋の渡りの途中に一時的に観察される鳥）23種および迷鳥2種である。

ゴルフ場の鳥の特徴は，出現種の生活場所を検討してみると顕著になる。陸鳥74種のうち，留鳥15/23種，夏鳥5/7種，冬鳥14/22種，旅鳥4/20種，迷鳥2/2種の合計40種（54.1%）は本来の生活場所が樹木の疎らに生えた疎林か，開けた場所や草原の種であり，森林性だが生活場所選択の幅が広く，疎林にも生息する8種（後述）を含めると，その数は48種（64.9%）にも達する。さらに，毎年かならず観察される種（表1の太字の種）に限ってみると，47種の37種（78.7%）が上述の種であり，大部分の種がゴルフ場に5ケ月以上の長期間滞在する夏鳥，冬鳥および留鳥である。

このように，樹木が疎らに生えていて，芝生があるゴルフ場で長期間滞在する鳥は，疎林，開けた場所，草原あるいは生活場所選択の幅が広い種に限られているのである。

一方，森林性の種は留鳥8種，夏鳥2種，冬鳥8種，旅鳥16種の合計34種が観察されている。ただし，留鳥のイカル，シジュウカラ，エナガ，メジロ，コゲラ，夏鳥のツミ，冬鳥のカケス，マヒワの8種は生活場所の選択幅が広い種であり，疎林にも生息しているので，純森林性の種は26種ということになる。

関西自然保護機構業績第79号

表１　相模原ゴルフクラブの鳥類相（留は留鳥，夏は夏鳥，冬は冬鳥，旅は旅鳥，迷は迷鳥をそれぞれ示し，太字は毎年観察された種を示す。）

1	ハシブトガラス	留	25	オオヨシキリ	旅	49	サンショウクイ	旅	73	ヤマシギ	旅
2	ハシボソガラス	留	26	セッカ	留	50	メジロ	留	74	オオジシギ	旅
3	オナガ	留	27	エゾムシクイ	旅	51	キセキレイ	留	75	バン	旅
4	カケス	冬	28	センダイムシクイ	旅	52	セグロセキレイ	留	76	キジ	留
5	ムクドリ	留	29	メボソムシクイ	旅	53	ハクセキレイ	冬	77	コジュケイ	留
6	コムクドリ	旅	30	エゾビタキ	旅	54	タヒバリ	旅	78	カルガモ	留
7	スズメ	留	31	キビタキ	旅	55	ビンズイ	冬	79	コガモ	冬
8	イカル	留	32	オオルリ	旅	56	ヒバリ	留	80	サシバ	旅
9	シメ	冬	33	オジロビタキ	迷	57	ツバメ	夏	81	オオタカ	冬
10	アトリ	冬	34	サンコウチョウ	夏	58	イワツバメ	夏	82	ツミ	夏
11	カワラヒワ	留	35	トラツグミ	冬	59	コゲラ	留	83	トビ	留
12	マヒワ	冬	36	ツグミ	冬	60	アオゲラ	留	84	アオサギ	留
13	ホオジロ	留	37	アカハラ	冬	61	アカゲラ	冬	85	コサギ	夏
14	カシラダカ	冬	38	シロハラ	冬	62	カワセミ	留	86	ヨシゴイ	夏
15	ミヤマホオジロ	冬	39	クロツグミ	旅	63	アマツバメ	旅	87	サンゴイ	夏
16	アオジ	冬	40	マミチャジナイ	旅	64	ヨタカ	旅	88	ゴイサギ	留
17	シジュウカラ	留	41	ジョウビタキ	冬	65	トラフズク	冬	89	カイツブリ	留
18	ヤマガラ	留	42	ルリビタキ	冬	66	アオバズク	旅			
19	コガラ	冬	43	コルリ	旅	67	カッコウ	夏	90	アミハラ	
20	ヒガラ	冬	44	モズ	留	68	ツツドリ	旅	91	ギンパラ	
21	エナガ	留	45	アカモズ	夏	69	ホトトギス	旅	92	コウカンチョウ	
22	キクイタダキ	冬	46	チゴモズ	夏	70	キジバト	留	93	コウラウン	
23	ウグイス	冬	47	ヒレンジャク	冬	71	アオバト	留	94	セキセイインコ	
24	ヤブサメ	旅	48	ヒヨドリ	留	72	ヤツガシラ	迷	95	ダルマインコ	

ゴルフ場の鳥のもう一つの特徴は，観察される森林性の鳥が旅鳥である点にある。ゴルフ場に長期間滞在する留鳥，夏鳥，冬鳥のうち，繁殖あるいは毎年観察される種は留鳥のアオゲラ，夏鳥のサンコウチョウ，冬鳥のヒガラ，キクイタダキの４種にすぎない。このうち，針葉樹林性のヒガラとキクイタダキは非常に小型な種であり，ゴルフ場内の針葉樹林で十分に生活できるのだろう。サンコウチョウは，ゴルフ場内にわずかに残された人手がほとんど加わっていない落葉広葉樹林で繁殖している。アカゲラに関しては，森林性の種と考えられているが，営巣場所さえあれば疎林でも生活できるのかもしれない。したがって，森林性の種に関しては，ゴルフ場は繁殖や越冬などの長期間の滞在には不適な場所であることは確かである。ただし，渡りの途中に短期間しか滞在しない場合は，ゴルフ場の林でも休息場所としての役割をはたしうるであろう。

当ゴルフ場の場合，下水処理施設が整っている上，農薬もあまり使用されていない。そのため，池は農薬に汚染されておらず，スイレンが池面を覆い，トンボ類などの水生昆虫や魚類も豊富で，池の面積そのものは狭いにもかかわらず，水鳥と水辺の鳥が15種も観察されている。繁殖種は，魚食性のカワセミ，カイツブリと雑食性のカルガモがいる。農薬の汚染がなく，護岸されていない水域は，水鳥のみならず，陸鳥の水浴びや水飲み場としても重要である。

なお，野生の哺乳類では，アカネズミ，モグラ，ノウサギが繁殖している。

繁殖鳥類の変遷

表２には1971年から1988年までに繁殖した種を示した。繁殖鳥の種数は，繁殖確認数が25種であり，その他に，巣の発見が難しく繁殖は未確認だがその可能性が高い１種がいる。

この18年間に，繁殖した種は少しずつ変化している。1971年から1977年まではその数に変化がみられなかったが，その後，ハシボソガラス，チゴモズ，アカモズ，モズの４種が減少し，カワセミ，ハシブトガラス，イカル，コゲラ，カイツブリ，キジ，エナガ，サンコウチョウ，ツミ，

表２　繁殖鳥の変遷（Ｂは繁殖確認，＊は観察されたが繁殖を確認できなかったことを示す。）

		'71－'78	'79	'80	'81	'82	'83	'84	'85	'86	'87	'88
1	オナガ	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B
2	ムクドリ	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B
3	スズメ	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B
4	カワラヒワ	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B
5	ホオジロ	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B
6	シジュウカラ	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B
7	ヒヨドリ	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B
8	カッコウ	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B
9	キジバト	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B
10	カルガモ	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B
11	コジュケイ	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B
12	ハシボソガラス	B	B	B	B	B	B	B	B	＊		
13	チゴモズ	B	B	B	B	B	B	B	＊	＊		
14	モズ	B	B	B	B	B	B					
15	アカモズ	B	B	B								
16	カワセミ	＊	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B
17	ハシブトガラス			＊	B	B	B	B	B	B	B	B
18	イカル	＊	＊	＊	＊	＊	B	B	B	B	B	B
19	コゲラ				＊	＊	B	B	B	B	B	B
20	カイツブリ					＊	B	B	B	B	B	B
21	キジ				＊	＊	B	B	B	B	B	B
22	エナガ				＊	＊	＊	B	B	B	B	B
23	サンコウチョウ			＊					B	B	B	B
24	ツミ						＊	＊	B	B	B	B
25	アオゲラ									＊	B	B
26	メジロ									＊	＊	＊

アオゲラの10種が繁殖し始めた。おそらく，メジロも１年中みられるので，繁殖している可能性がある。そのため，繁殖種数は当初の15種から25種（＋１種）に増加した。

繁殖しなくなった４種のうち，ハシボソガラスはハシブトガラスと置き換わったが，これは農村型のハシボソガラスと都市型のハシブトガラスの交代であり，ゴルフ場周辺地域の市街地化によるものと思われる。モズ類３種の減少は1980年代になってからの藪の伐採と関係しているのかもしれない。しかし，アカモズとチゴモズの場合は繁殖番数が少なかったので，毎年渡ってきていた個体の死亡によって繁殖が途絶えた可能性もある。モズは周辺地域で現在も繁殖していて，ゴルフ場では冬鳥になっている。

新たに繁殖を始めた10種のうち，コゲラ，エナガ，サンコウチョウの３種は周辺地域で繁殖していたことが確認されていて，おそらくイカル，キジ，アオゲラも繁殖していたものと思われる。また，カワセミ，カイツブリの水鳥は直線距離にして約４㎞離れた相模川周辺で繁殖していたにちがいない。これまでに周辺地域で繁殖が確認されていなかった種は小型の猛禽類であるツミである。ツミは1982年に初めて出現し，1985年から繁殖するようになった。その後，隣接の東京都町田市でも一番の繁殖が確認されている。

これらの鳥のゴルフ場への進出が周辺地域の市街地化に伴う緑地への逃避なのか，あるいは1980年代から始められた相模原市の緑地保全の結果による個体数の増加なのか，現在資料を収集中である。なお，留鳥のセッカとヒバリが繁殖していないが，これはフェア・ウェイ，ラフとも芝生が短く刈り込まれているためであり，周辺地域では繁殖している。

巣箱の架設による繁殖番数の増加は，ムクドリとシジュウカラでみられた。ムクドリ用の巣箱は1970年に70ケが初めて架設され，1971年に129ケ，1972年に156ケ，1973年以後は170ケに保たれている。ムクドリの繁殖期は４月中旬から５月上旬までの前期とそれ以後６月中旬までの後期に分けられる。前期には架設された巣箱のほぼすべてが利用され，常設巣箱の他に年によって10ケから70ケの巣箱が新たに増設されたが，これらの巣箱もすべて利用された。後期には巣箱の50

%から70%が利用されるが，後期の番の大半は前期で繁殖しなかった番である。標識やトラップによる捕獲調査から，これらの番が巣箱不足のために前期で繁殖できない番であることがわかった。さらに巣箱を増設すれば，より多くの番が繁殖するにちがいない。

一方，シジュウカラはゴルフ場内に天然の樹孔が少なかったため，1983年までは10番以下しか繁殖していなかった。1984年に105ケ，1985年に199ケ，1986年以後は240ケの巣箱を架設したが，繁殖番数は1984年の44番から105，97，114，106番と増加した。ただし，巣穴のみを防衛するムクドリと違って，シジュウカラはかなり広いテリトリーを防衛するので，増設した巣箱だけ繁殖番数が増えるわけではない。

おわりに

ゴルフの発祥地であるイギリスでは，灌木が疎らに生え，草が伸び放題の深いラフのあるゴルフ場が多いが，日本では当ゴルフ場のように，フェア・ウェイ間やティとグリーンの前後に樹木を植えているゴルフ場が一般的である。しかし，このような林は幅も面積も狭い上，経営上の問題として，林内でのボール探しの時間を短縮し，またロスト・ボールを少なくするため，中・下層木と下生えを刈っているので，林は疎林的になっている。したがって，ゴルフ場は疎林，開けた場所や草原を生活場所にしている鳥にとって，かなり好適な場所といえるだろう。ただし，新設のゴルフ場がこれらの鳥にとって好適な場所になるまでには，かなりの年月がかかるにちがいない。

一方，上述した理由によって，本来の層状構造をもった林にはなりにくいため，森林性の鳥の繁殖には不適な場所であるが，設立が古く，現在では市街地内にあるゴルフ場は，森林性の渡り鳥の休息地としての役割をはたしている。とはいえ，この中継基地の役割はゴルフ場である必要はなく，樹木の多い公園であればよい。

鳥の側からみれば，森林地域にゴルフ場が新設されることは，特に森林性の鳥にとって永久に生活場所を失うことになるし，農耕地域に新設された場合でも，人手不足からゴルフ場の管理を機械や農薬に頼らざるをえない現状では，既存のゴルフ場ほど疎林，開けた場所および草原の鳥にとっての生活場所になりうるかどうか疑問である。